

今日出海對話集



講談社

今 日出海対話集

昭和四四年六月一六日 第一刷発行

著 者 今 日出海

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―一二 郵便番号／一二二

電話／東京(九四二)一一一一(大代表) 振替／東京三九三〇

印刷所 慶昌堂印刷株式会社

製本所 共同製本株式会社

定 価 四八〇円



落丁本・乱丁本はお取り替えます。

目次

1 これからの日本と日本人を考える

国としての旗じるしを持って発展しよう

松下幸之助
松下電器産業会長

2 もの申す！ 現代日本の七不思議

エラーで伸びる自民党から学生に媚ひる教授まで

石田 博英
衆議院議員

3 北爆反対とミニスカート

なぜ日本のインテリと学生は信用できないか

池田弥三郎
慶応大学教授

4 バイタリテイ和尚の秘密

異常児兄貴と秀才舎弟のこきおろし対談

今 東光
作家

5 日本人のバックボーン

世界の美女談義から社会主義的日本の批判まで

貝塚 茂樹
京都大学名誉教授

6 日本には新しい革命が必要だ

世界的視野を欠いた新聞報道から核問題まで

若泉 敬
京都産業大学教授

7 共産主義はもう古い

イデオロギーと感情に振りまわされているこの日本人

小汀 利得
評論家

143

121

99

77

55

33

9

8 文化庁長官のため息

最近の日本文化からフランスの学生運動まで

桶谷 繁雄
東京工業大学教授

165

9 八幡製鉄では全優の学生は採用しません

企業はこんなタイプの青年を求めている

藤井 丙午
八幡製鉄副社長

185

10 やがて日本は世界一豊かな国になる

10代で事業家、20代で代議士になった男のてっかい夢

田中 角栄
自民党幹事長

207

11 暴力学生は甘やかされている

フランスの五月革命から日本の大学騒動まで

河盛 好蔵
比立女子大学教授

227

12 日本人は「金魚鉢の中の金魚」だ

「ガンコ者」を自認する二人の文化人の怒り

永井 龍男
作家

249

装
幀

岩
本
正
雄

今
日出海對話集



著者

対話 1

これからの日本と日本人を考える

国としての旗じるしを持って発展しよう

松下幸之助

松下電器産業会長

今 日出海



松下幸之助氏

松下幸之助氏を尋ねて、京都南禅寺近くの真々庵へ行く。京都らしい静かな邸宅である。門を入ると先ず緑濃い杉苔に眼を奪われる。この苔は関東の土には滅多に馴染まず、京の土と水に生々と根づく苔である。他庭がまことに美しく、こんな庭を眺めていたら、私などは何もせず、誰とも会わず、ただ優然と一日を過ごしてしまいたいそうだ。

さて松下さんは若い時から営々と働き、黙々と考える人で、私は氏の評論の愛読者である。というのは氏の考えが独創的で、誰かの思想の敷衍や演繹でもなく、また誰の影響も感じられない。終始自分の感覚と思案で、人の気がつかぬことを指摘し、論評する。それが奇想天外な思いつきではなく、言われてみてなるほどそうとか、その通りだといった工合に合点するが、容易に誰も思いつかぬことを思いつく独創家である点、私は前々からひそかに敬意を抱いていた。

(今 日出海記)

とらわれない精神

今 私、目を悪くしてからあまり原稿書かずに養生してたのですが、なんか書きたくなつて、親しくしていただいていた吉田茂さんのことを「現代」に十二月号まで書いたんです。書き上げた翌日、一年間の骨休めに京都へ遊びに行きまして、六日目に突然吉田さんが亡くなら

れたという報せを受けましてね。

松下 今先生はしじゅう会っておられたんですね。

今 吉田さんは大磯でございまして。鎌倉の私のところから海岸伝いで行きますと自動車で三十分ぐらいなんです。人を呼ぶと食事をいっしょにするのが楽しかったですね。ところが「今日は急ぎますから」というんで食べないで帰る人がある。一人前あまるでしょう、すると、私に電話をかけて「めし食いに来ないか」って。

松下 最後まで元気でしたな。いいにくいことをいい、思うままをやり、なにも気かねせんと、欲するまま一生終わったんやから、非常に得な人でした。近來珍しい人ですな。

今 そうです。ちょっと子供みたいにわがままなところがありまして、新聞記者たちにもそのところを冷やかされたんてすけれども。

松下 そこに魅力があったんてしょうね。たいていの人は氣を^う使って右顧左^{ひだり}顧するけれども、あの人はそれをしなかったのがよろしいな。

しかし、人間はいつか死んで行くんやが、死もまた進歩である。という考え方を私はしているんですが。つまり年をとれば日々シワがふえる。これも一つの進化です。進化ということとは日進月歩の一つなんだから、われわれは日々に進歩しつつある。シワでさえ進歩なら、死は一大進歩である、と。そう考えると、死は何もいとうところはな^い。大飛躍や、と思っておけばよい。

今 そのお考え、よくわかります。私の父は霊智学——セオソフィというイギリスやイントに会員がある会のメンバーでしたが、霊智学というのは、人間は何度も生まれ変わるんだ、それで進化を遂げて行くのだ、という説なんです。

だから、いまおっしゃるように、死ぬということはまた生まれ変わるんで、一年生から二年生になるのだから進歩である、進化であるという説なんです。セオソフィからいうと、あなたのご意見は非常におもしろいですね。

松下 霊魂不滅、といいましょう、ぼくは宗教について何も知識ないけど、霊魂の不滅は認めているんですよ。ただ、不滅とはいっても個々に存在するのではなくて、霊魂は親許というか、原体に帰る、という考え方です。

鉄はいろんな形のものに造られますわな。それが最後には溶鉱炉へ入って元に戻る。そしてまた違った形に生まれ変わる。それとおなじことで、個々のかたちでは存在しないけれども、霊魂そのものは滅びていない。そういうふうに考えたらいんじゃないか。

霊魂がないという考え方は、少しおもしろくない。霊魂はあるんだ、個々の霊魂は、肉体が死んだらまた一体化するんだ、そしてそこからまた発生するんだ、という見方を一応とったらどうだろうと考えてみるのです。まだ結論を得てませんけどね。

今 新しい宗教の教祖になれますな（笑）。

松下さんの人生論とか、本や雑誌によくお書きになる論文の愛読者なんですよ、私は。いつ

だったか「文芸春秋」にお書きになったときに、いちばんいいのはこれだといって、たしか読者賞というのを差し上げたことがある。ちょっとばかり賞金がつくんです。そしたら、賞金是要らん、賞状だけくれ、とおっしゃって（笑）。

松下 あれは、池田前首相が所得倍增政策を唱えだしたところで、「所得倍增の二日酔い」論。今 非常におもしろかった。戦後、衣食住がよくなった中で、住か一番遅れているのは、ちょっと小金持ってるやつが昔は借家を建てて家主になろうとしたものだが、今はそれか許されないためだ、という趣旨の論文でしたな。

小林秀雄っていう、評論家の男なんですが、きのう会って話をしたんです。対談をはじめるんだが、第一回目はどうしても松下さんにお目にかかりたいから、あす京都へ行く、といったら、「どういう人だ」ときくんですね。お話するのはこれが初めてだけれども、あなたの考え方というのは「だれかの説」じゃないんですな。これ聞いたことあるな、というのではなくて、独自の考えがあって、社会とか政治とか万般を自分の目で評論しておられる。だからそのことと、日本で一番たくさん税金を払っておられるのに財界の顔役にもならず、一人ていろんなことを考えている人らしいね、ということを小林君にいったのです。そしたら小林君も「よくわかった。会ってこい」といってましたけれども、私はいまいった独創的な考えが好きなんです。

松下 私は自分の生活体験から感じとるだけで判断しているのです。本をあまり読みません

し、学問ありませんから、なにものにもとらわれないのですな。なににの説、というのが頭に入らないわけてすよ。

今　いまの若い人たちは、学問という名のもとに、人の書いたものばかり読んで、それを覚えるでしょう。あれがとのくらい若い連中を毒しているかわからんと思うんです。学校の先生がそうですわ。

松下　今日の生活というものは、先人の学説であるとか、宗教の教えとかいうものが、体験としてみんなの身について成り立っているわけですものな。つまり学説や教えは生活の中に現実

に生きている。それに日々接して生活しているかぎり、あらためて読まんでも自然に吸収されるわけですね。

日本の文化は仏教文化であるといわれますけど、確かに仏教の説とか教えとかが生活の中に生きている。われわれが日ごろ使う言葉の中にも、そういうものが脈うっている。本を読まなくても、はたて感じとれるんですな。

今　老子の言葉に「学を絶てば憂いなし」というのがありますからね。それをただ学んで覚えとるだけじゃ、なんにもならない。いまの学生のイデオロギーにしたところで、百年以上も前の、まだ経済学なんか発達してないころのマルクスの学説を鵜呑みにして、ただ覚えてるだけですよ。

松下　マルクスの学説も、ある程度は今日の実生活に生きているでしょう。しかし、それだけ

にとらわれてはいけない。すべてのものを第三者の立場で見ないとね。一つだけ勉強してそれに集中すると、どうしてもとらわれてしまう。そこから自分の説が出てきますから、こだわってしまふわけです。ぼくは何も読んでいないから、こだわるわけないんですわ。

今　とらわれない精神というのは、大事なことですよ。いまはみんなとらわれて、狐かついたようなもので、そのあたり狐つきばかりですわ。

旗じるしを決めよ

松下　今日の世相には、いいところも悪いところも、いろいろあると思いますが、戦後二十年間の日本というのはいわば火事場です。とにかく火を消さなくてはいけないから、水もかけるし、右往左往走りまわってきたわけですね。その間には、火を消すために人の足を踏んだりすることがあっても、まあ許されますわな。ところが、もう火は消えた。日本は大体正常に戻った。その中で落ち着いて考えてみると、私は「これでいいんかな」という感じがするんですかな。もう人の足を踏むことは許されませんからな。

これからの日本は、正常な見方に返って国家経営を考えていかないかん。ところが日本人には、国家経営の基本理念があるのかどうか、私はそれが気になるのですがね。今先生、いかがでしょうか。

今　いや、きょうはそれをお伺いしたいと思ってきたのです（笑）。